

シンポジウム

科学哲学と分析哲学：両者の歴史的関係を再考する

オーガナイザー・提題者
提題者

小山 虎 (大阪大学)
笠木 雅史 (名古屋大学)

趣旨説明

当学会はその名が示す通り「科学哲学」の学会である。一方で、いわゆる「分析系」の学会であることも周知の通りであり、科学とはほとんど関係がなくても明らかに分析哲学に含まれる研究発表（形而上学や美学など）が毎年の大会で当然のように行われている。しかし、学会員にとっては見なれた光景であっても、少なくとも外部の人間からすれば不思議な状況に映るのではないだろうか。

これに対し、科学哲学と分析哲学の歴史的つながりを知っていれば別に何の不思議もない、という意見が寄せられることが予想される。しかし、本当に何の不思議もないのだろうか。科学哲学と分析哲学の間には、そのような深いつながりがあるのだろうか。ここで分析哲学史（分析哲学の歴史についての研究）に注目すべきであると考えられる。分析哲学にも100年以上の歴史があり、近年の歴史研究により、従来のような単純な歴史観の見直しが必要であることが明らかになりつつあるからである。

本シンポジウムでは、この状況を踏まえ、科学哲学と分析哲学の歴史的つながりが実際にはどのようなものだったのかを改めて再考する。本シンポジウムが注目するのは1930年代である。まず、小山が準備として、1930年代当時の分析哲学と科学哲学の状況を紹介する。当時、論理実証主義者が統一科学運動（Unity of Science Movement）を推し進めていたことはよく知られているが、ウィーン学団以外に、ポーランドのルヴォフ・ワルシャワ学派（Lvov-Warsaw School）とドイツのベルリングループは分析哲学と科学哲学の発展に大きな影響を及ぼしている。次に笠木が、イギリスにおけるケンブリッジ分析学派（Cambridge School of Analysis）とオックスフォード日常言語学派を中心に、イギリスにおける初期分析哲学の成立史をイギリス観念論の影響と論理実証主義の受容という観点から紹介する。そして最後に、再度小山が、1930年代以前のアメリカの哲学の状況を観念論を中心に理解することで、アメリカ哲学が論理実証主義とRussellやWittgensteinなどの初期分析哲学者だけでなく、様々な要因によって変容していったことを紹介する。

科学哲学と分析哲学の歴史的関係が実際にはかなり複雑であり、さらなる研究が必要であるということを本シンポジウムのオーガナイザーは痛感している。この認識がフロアとの議論を通じて共有できれば幸いである。